

「国語教育史と実践に学ぶ会」の歩み

横堀利明

はじめに

早稲田大学国語教育学会の研究部会である「国語教育史と実践に学ぶ会」（以下「学ぶ会」と略称）が発足して今年度（平成二十一年度）で二十一年目となる。来年度早々には百五十回を迎えることになる。この間、私は事務局を三度、都合七年間担当した。本研究会との関わりが深い人間ということで編集部から「学ぶ会」について報告せよとの指名を受けたと想像される。本稿では、「学ぶ会」の創設から現在に至るまでの「史的」な流れを、「私的な記憶をもって報告し、「早稲田の国語教育」の一端を担ってきた歩みを記していきたいと思う。なお、失礼ながら文中に登場する方々の敬称は省略させていただく。

前史

早稲田大学国語教育学会は中学、高校の教育現場に立つ教師と大学の研究者が共同して、新しい国語教育を創造していくことを

大きな理念に掲げ、今日まで活動を続けている。本学会がスタートした当初は年間、七、八回の例大会が行われていた。しかし昭和五十五年頃から、例会の回数が大会を含めて四回ほどに減少した。こうした現状に物足りなさを感じていた教員が集まって自主的な勉強会を開くことになった。瓜生鐵二、町田守弘の当時早稲田実業学校に勤務していた教員が中心になり、教育学部教授、榎本隆司の研究室を借りて勉強会（早稲田大学国語教育研究会、以下「早国研」と略）を開くこととなった。「早国研」の歩みについて私は詳細を知らない。私が最初の赴任先である都立大島南高等学校から東京に戻った折に、ゼミの担当であった榎本より「早国研」について話を聞き、参加することになったのである。私はこの会に参加することで、はじめて授業について本格的に学ぶことになった。当時、前二氏の他に、有元秀文、伊藤博、犬塚大蔵、岸洋輔、永田正博、野田佐知子、村井正明、芳澤隆らが参加しており、私は昭和六十二年（一九八七）の春に初めてこの会に出席をした。この時一緒に会員になったのが高野光男であった。この年「早国研」では韻文指導を年間テーマとして活動していた。田辺聖子「花衣ぬぐやまつわる」：わが愛の杉田久女」の読書会、生徒の感想をプリントにまとめて共通理解をはかり、鑑賞を深める瓜生の実践、英語のEFLNOCを使った高野の俳句指導など、多くの優れた実践に触れることができた。私の授業実践の基本はこの会で培われたのである。

この年度の最後であったと思う。確かな記憶はないが、「早国研」を解消するという話が持ち上がった。その確かな理由について

ては判然としないが、榎本の研究室で「私的」な研究会が行われていることに對して、批判する声があつたようである。「榎本先生に迷惑をかけるわけにはいかない」ということで、「早国研」そのものを解消するという事になった。私にしてみれば、教員として勉強する場を得たばかりであり、それをたった一年で失うのかと残念に思つたものである。

「国語教育史と実践に学ぶ会」の発足

「早国研」は解消された。だが、それと同時に、国語教育学会の下部組織として研究会を作ろうという動きが生じてきた。研究部会の創設の主旨は、例大会の減少に伴つて停滞しつつある学会活動の活性化が目的である。しかし、我々「早国研」に関わつていた人間から見ると、「失つた学び会場の創出」という意味を持つことになる。私は研究部会をスタートさせる準備会から参加をした。三回ほど話し合いがもたれたかと思う。「早国研」に参加していたメンバーも多く加わり、研究会のあり方について話し合われた。その結果、二つの研究会を設置することとなった。一つは「古典教育研究会」であり、もう一方が「学ぶ会」であつた。「学ぶ会」については、「早国研」のスタイルをモデルとして継承し、実践報告に重点を置きつつも、歴史から学ぶことも必要であるということ、[「国語教育史と実践に学ぶ会」という名称に定まつた。準備会の後のことと思う。当時高田馬場にあつた「丹頂」というバーから、内藤哲彦が事務局担当の柳瀬喜代志に会の名称を連絡したことが思い出される。蛇足だが「早国研」のメンバー

は、その後同人雑誌という形で教育実践、論文等を発表する活動を始めた。「青胡桃」という雑誌は5号刊行され、現在は休刊中である。

こうして昭和六十二（一九八八）年七月二日（土）第一回の「学ぶ会」が開催された。初代の事務局には高野光男が就いた。会の運営については以下のような形で行っている。

・年間テーマの決定

・読書会と実践の報告の二本立て

・五、六、七、十、十一、十二、三月の年間七回、土曜の

午後（十五時半～十八時）実施

・司会、記録の輪番制

・記録のまとめ

初期の活動

発足当初は、浅田孝紀、大塚敏久、渡部洋一郎など国公立で国語教育を学んできた方々が、「何にも知らない」早稲田の国語教育に新しい血を注ぎ込んでくれた。読書会に使用された図書をいくつかあげてみると、「宇佐美寛『国語科授業批判』」、「井関義久『批評の文芸』」、「増淵恒吉『国語教育論集』」などがある。恥ずかしい話だが、学生時代、国語教育の著書に全く触れることのなかつた私にとって、これらの書籍は見知らぬ世界のものであり、時にはその内容に違和感を覚えることもあつた。しかし、今思えばこうした勉強こそ、「早稲田の国語教育」に欠けていたものであ

ったと思う。

初年度のテーマは「国語教育の現在」というほんやりとしたものであった。会としては手探り状態であり、多くの方の様々な報告、実践を盛り込みつつ進めていった。「早国研」からのメンバーに加え、猪之原総一、佐野正俊、沢豊彦、野村耕一郎、野村敏夫、古井純士、堀内雅人、星野智也、和智潔などの報告、実践は浅田らとは違った形で「学ぶ会」を活性化させた。

記録についても当初一悶着あった。事務局の高野が、会の記録を研究会ニュースという形で参加者に向けて発行したところ、「分派活動か」という批判をされたようである。その後、趣旨が理解されてか、毎回の活動の様子を研究会ニュースとしてまとめるようになり、現在に至っている。

国語教育史の基本を学んだということでは、二年目に取り上げた「文学教育基本論文集一」の読書会は大きな力になった。毎回報告者を決めて論文の内容を報告し、浅田、大塚らが詳細な解説を加えてくれる。多くの参加者が、西尾、時枝論争から始まって一通りの国語教育史の流れを知ることができたのは、この読書会に負うところが大きいであろう。テーマについては、毎年三月の会に、その年度の反省と次年度のテーマを決めることで話し合いが持たれた。

四年目には高野から私が事務局を受け継いだ。私が担当した平成三（一九九二）年当時、すなわち、一九九〇年代前半は、小森陽一、田中実の活躍に象徴されるように、「読み」に関心が集まり、教材の読み直しがさかんに喧伝された時代であった。「学ぶ

会」でも二年間にわたって「安定教材を問いなおす——その実践史と新たな読み」——というテーマで、いわゆる安定教材について集中的に学んだ。各報告者が、安定教材の実践の歴史についてできる限り調査し、その成果の上になつて、新たな読みを提示しようするという試みであった。この二年間の活動とその後が続いた「中学の教材 高校の教材 読みの位相を検証する」（芥川の「トロッコ」と「羅生門」の読みが、中学高校でどのように異なるかについての検証）とで、教科書に掲載されている安定教材についての基本的な勉強ができたと思う。

特任教授の支え

「学ぶ会」を語る時に、国立大学を退官されて早稲田に着任された特任教授の方々を忘れることはできない。大平浩哉は平成四（一九九二）年から「学ぶ会」に参加され、以後退職まで、ほぼ毎回「学ぶ会」に足を運んでくれた。田近もまた大平とともに参加者に国語教育に関する最新の知見を提供し、また私たちの実践を丁寧に評価し、励ましを与えてくれた。浜本は退職の前年、一年間にわたり、垣内松三、山路兵一など人物に焦点をあてた国語教育の連続講義を行ってくれた。「学ぶ会」は通常参加者二十名弱という小さな会であるが、こうした先生方に直接アドバイスをいただけるという、学ぶものとしては大変ありがたい環境に身をおくことができた。

大平、田近、浜本が参加をしてくれたことで、赤荻千恵子、有働玲子、坂口京子といった方々の参加を得るなど、「早稲田」の

枠を超えたつながりができていったことも「学ぶ会」を大きく成長させてくれた要因であると思う。

活動の広がり

「学ぶ会」への参加者も徐々に増えていった。石出靖雄、榎本隆之、小原俊、木村將弘、熊谷芳郎、黒川孝広、佐々木聖司、西村健などの参加も得て発表が充実していった。また次第に「学ぶ会」の会員が学会の活動にも参加するようになっていった。例大会の発表をしたり、学会の事務局、編集委員に加わったりするケースも多い。一時、「早稲田国語教育研究」に研究会の会員が一本寄稿することが行われていた（現在はそうした了解はない）。また会員の活躍は学会内にとどまらない。中高の現場から大学、官公庁に移った方や教科書の編集に加わったり、国語教育の著作、文学研究の著作等を刊行されるなど多くの方が活躍の場を広げている。一二〇回に犬塚大蔵は「中学における評論文とは——その現状と問題点を考える」において小学校教材と中学受験の題材との乖離を問題にした発表を行ったが、この発表がきっかけとなって、「読解演習はじめての評論文20選」（明治書院）という本が刊行されるなど会の活動が具体的な成果を生むケースも出てきた。ちなみにこの本の祖型ともいえるべき「現代評論文選」（平成七年刊・明治書院）には、榎本隆之、沢豊彦、三浦康彰、芳澤隆の会員四人が編集に携わっている。

二十一年の間にはいろいろなことがあった。内藤哲彦と野村敏夫が亡くなったことは誠に残念なことであった。中高の現場に属

する会員が多い中、明星学園で小学生を指導した内藤は、実践報告を通していつも「子供とのつきあい方」を教えてくれた。「言葉と心が響き合う表現指導——主体交響の国語教育」、「国語政策の戦後史」を著し、二〇〇八年に早稲田に着任した野村は、これからの「早稲田の国語教育」をリードしていくことと期待していただけに、その早すぎる死が惜しまれる。

新たな動き

我々四十代後半から下の世代が会員として参加せず、新会員が増えない時期が長く続いた。しかし、団塊の世代が退職を迎えたことの影響であろうか、近年、若い会員の参加が増えてきた。気がつけば、親子ほど年の離れた若い会員と一緒に学ぶ時代になったのである。会員の中には、町田守弘研究室を巣立ってきた教員が多い。今彼ら彼女らの実践が新しい風を吹き込んでくれている。彼らのために、私たちが学んできたことを伝えていかなければならない時機にも来ているのだろう。私たちも年齢的には「ベテラン」の部類に入るのである。その一方で、榎本隆司は、早稲田大学退職後も、研究会に足を運び、私たちを厳しく指導してくれている。「結構なご発表でした」という当たり障りのない発表会ではなく、少ない人数で、言いたいことを言い合う、そうした緊張感をもって会に臨むことを、榎本は強調する。たがいの報告について忌憚らない意見を戦わせる、そこにこそ活性化のかがみがあるだろうし、「学ぶ会」が続いてきた理由があるのだと思う。私自身、発表をするたびに徹底的に叩かれるが、その都度新たに勉強

の必要を感じる。「ベテラン」とは見かけだけで、これから若い会員とともに学んでいかなければならないと思うのである。

結び

最後に、これまでに書ききれなかったことを雑駁に記しておく。二十一年の間には、いろいろなイベントも行った。一九九二年八月八日には錦城高等学校をお借りして、「高校生による高校生のための読書会」を行った。これは会員が所属する高校の生徒が集まって、読書会を行い、教員がそこにオブザーバーとして参加するというものである。一つの試みとして面白いものであった。一〇三回は、田近洵一の退職を機に「シンポジウム『国語教育から見た文学研究・文化研究』」に参加をした。一〇八回には横堀利明が都立練馬高校で「羅生門」の研究授業を行い、一一三回は同じ「羅生門」をテーマに、「シンポジウム 早大学院公開授業「羅生門」の分析——文学教材の指導法・指導目標を中心に」が開催された。一〇一回は日本国語教育学会高校部会との共催、また一四五回は日本社会文学会との共催で杉野要吉に講演をしていただいた。

研究会の補助費についても一言触れておきたい。私が最初に事務局を担当した頃なので、平成三、四年の頃のことと思う。会の通信連絡費等、会の運営のためにということで、会員一人あたり一〇〇〇円の補助をいただいた。現在は電子メールの普及で、連絡そのものの費用負担はだいぶ減ったが、その分、資料のコピー代等で有効に活用させていただいている（現在年間四二〇〇〇円

の補助を頂戴している）。この場を借りて「学ぶ会」の活動を支えていただいている学会員の皆さんにもお礼を申し上げたい。現在会員は四十名を超える。そのすべての方が毎回参加されるわけではないが、常時、二十名ほどの参加を得ている。活動は主に十六号館502—2教室で行っている。

会員の平均年齢が上がったためか、また各会員の現場での立場が変わって忙しくなったためか、最近、活動が少々おとなしくなっているように感じる。ここ数年テーマを設定せず、まとめのニユースも滞りがちである。多くは事務局である私自身の怠慢によるが、若い会員の刺激を受けて、もう一度、創設期の熱気を取り戻したいと思っている。

「私的」な記憶による記述であるために、思い違い、思いこみの部分もあるかと思う。誤りについてはご指摘をいただければ幸いである。また、本稿では個人名を多くあげさせていただいた。それは、様々な方面で活躍をされているこうした方々が「学ぶ会」で共に学んできたことを紹介したいと思つてのことである。お許しをいただきたい。

（都立戸山高高等学校）